凄い言い訳

栖坂月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
凄い言い訳

【Ｎコード】
Ｎ３３４８Ｒ

【作者名】
栖坂月

【あらすじ】
人間は言い訳をする生き物である。しかし一口に言い訳と言ったところで、そこには優劣が存在する。優れた言い訳を用意することが私のジャスティスである。

（前書き）

えーと、今回は大きな笑いではありません。
言うなればプチ笑いです。

僕はその日、終始不機嫌だった。
学生生活十年目にして初めての遅刻を、自転車のタイヤがパンクするという突発的なアクシデントにより被ったことも、決して無関係ではなかったものの、それ自体が不機嫌の根本的な理由ではなかった。
低く広がる雲に天井を覆われた、見上げるだけで不安にかられそうな空の下、所々に穴の開いた雨除けにすらなっていないトタン屋根の自転車置き場で、大きく長い溜め息を吐く。その目前には僕の愛車、もう付き合い始めて三年になる赤い自転車がある。すでに滑り止めの凹凸を失っているハンドルを握り、スタンドを右足で蹴って開放すると、すっかり意気消沈した河豚の腹みたいに情けなくへたっている後輪がギリリと悲しげな悲鳴を上げた。
理由は不明だったが、パンクしていることは紛れもない事実だった。
跨ることなく、そのままの姿勢で学校近くにある自転車屋へと歩き始めながら、改めて考え始める。今朝、僕は正直に事実を述べた。教師は頷き、納得してくれて着席を促した。小言の一つすら飛んでこなかったのは、普段の僕が問題を起こすような生徒ではなく、学生という身分に溶け込んでいる程度の真面目な生徒であったからだろう。もちろん、あらぬ疑いなどかけられる故もないし、それを望んでいるワケでもない。
しかし同時に、何か物足りなさがあったことも事実だ。
例えばそう、これがゲームやアニメの主人公だったらどうだろう。小言どころか鉄拳が飛んできたところでおかしくはないし、バケツを持って立たされるレアイベントに発展するなど当たり前すぎるほど当然の展開と言えるだろう。少なくとも、何も言わずにスルーなどあり得ない話だ。

いや待て。確かに僕は彼ら主人公のような華などない。しかし彼らとて、主人公だからというだけでそれらのイベントを発生させたのだろうか。そこには何一つ、努力の介入する余地はなかったのだろうか。

否、断じて否だ。

ツッコミにボケが必要であるように、レアイベントの発生にはフラグが必要になる。遅刻というイベントを発生させるためにパンクが起きたと考えるなら、何かが足りなくてレアイベントの発展には至らなかったと言えるのではあるまいか。彼らと僕に、一体どれほどの違いがあるのだろうか。僕はどうしてスルーされ、彼らは鉄拳を浴びているのだろうか。

その経緯を脳内で反芻していた僕の足が、ささやかなタイヤの悲鳴と同時に停止する。ふと気付けばすでに自転車屋の前に辿り着いていた。歩きながらの思考というのもなかなかに趣があると思うが、このまま歩いて帰ってしまったら明日の朝はバスを利用しなければならなくなる。財政面での不安はともかく、僕はあの待ち時間というものがどうにも好きじゃない。自転車で風を切っている、他の誰とも時間を共有していない状態が、性に合っているのだ。

そんな理由以前に家まで徒歩で帰るという面倒な状況を回避するために、僕は無骨な引き戸を開けて奥の茶の間でテレビを見ていた店主を呼び出し、パンクの修理を依頼した。修理自体は十五分もかからず、お札一枚と硬貨一つを渡して自転車屋を後にする。やがて、ようやく戻ってきたように感じられる風の中に身を投じると、改めて今朝の問題が思考の端から浮かび上がってきた。

一つわかったことがある。

遅刻には言い訳が必要なのだ。それも自転車がパンクしましたなどという平凡な、夏みかんを食べてすっぱいと言ってる程度の甘ったるいものではなく、もっと強烈な、ツッコミを入れずにはおられないような言い訳が必要なのだ。僕にはそれがなかった。だから何も起こらず、スルーされてしまったのだ。

今日の出来事は無遅刻無欠席程度のアピールポイントしか有していない僕にとって、唯一無二の好機であったかもしれないというのに。後悔先に立たずとはこういうことかと実感させられる。

いや、まだ全てを諦めるのは早い。高校生活すら終わったワケではないのだ。この先大学や専門学校、社会に出たところで遅刻のチャンスがなくなるという道理はない。むしろニートにでもならない限り、その可能性は無限に広がっているとすら言えるのではないだろうか。

そう、今からでも『凄い言い訳』を考えておけば、きっと有意義な結末が待っている。僕はそう信じることにした。

とはいえ、どんな言い訳が良いのだろうか。巧妙に過ぎて信じられては意味がないし、あまりにも突飛であれば子供染みた痛々しさが憐憫を誘うだけだろう。意外であり、ユーモアに溢れ、ありそうでなそさうなツッコミを思わず入れたくなる言い訳でなければならないだろう。これは極めて難問だ。

まずは定番として、何か善行をしたからというのはどうだろうか。横断歩道で困っているお婆さんを助けたとか、道に迷っている子供を助けたとか、そういったものだ。しかしこれは、定番であるが故にインパクトに乏しく、更に僕のキャラクター性からすれば意外性にも欠けている。下手をすると「そうか」の一言で片付けられてしまう可能性すらあるだろう。それどころか、無意味に良い人アピールをするウザい人みたいなイメージにも繋がりかねない。

却下だ。

ならば次の定番として、病気ネタならどうだろうか。僕は見た目には健康そのものだろうから、聞いたことのない病気を患っているというのはそれなりに意外性があるかもしれない。だが本気で同情されてしまったら冗談と言い辛くなるだろうし、だからと言ってそのまま病弱キャラを演じ続けるのも無理がある。そもそも、それでは求めるべきイベントに行き着けないだろう。

却下だ。

いっそのこと、あり得ない現象を引き合いに出してみるとかどうだろう。ＵＦＯの飛来とか超能力の発現とか魔物や物の怪との遭遇とか、遅刻の理由としては至極ダイナミックではある。が、これをしっかり冗談と受け取ってもらうためには、普段からそのための下準備をしておく必要があるだろう。いきなりこんな主張を始めたら、引かれるどころか病院へ行けと言われるのがオチである。僕は教室を沸かせたいのであって、凍り付かせたいのではないのである。

やはり却下だ。

帰宅までの道すがら、僕はアイデアを思い付いては駄目出しを行っていく。家に帰ってからも、夕飯を食べている最中も、ベッドに潜り込んでからも、そのことばかりを考えていた。しかしそれでも、納得のいく結論には達しない。

唯一、バスが混んでて遅れましたという秀逸な言い訳を思い付いたものの、世間的には超メジャーな言い訳らしく、今更僕の口から飛び出したところで誰一人笑ったりはしないだろう。僕がこの言い訳の発明者でなかったことが悔やまれる。

結局、ほぼ一睡も出来ないまま朝を迎え、それでも尚頭から離れない難問に悩まされ続けている僕は、受話器を取って電話をかけることにした。

「凄い言い訳考えるんで、今日は休みます」

（後書き）

電車が混んで遅れたというのは、生涯一度は使ってみたい言い訳です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3348r/

凄い言い訳

2011年3月3日14時55分発行